

# 言論の自由を守るために戦おう

## 正論



麗澤大学助教  
ジェイソン・モーガン

私はアメリカで生まれ育った。アメリカにいたときは、アメリカの位置付けが簡単にできていた。われわれアメリカ人は、自由な国民であり、ソ連や中国、その他の共産主義の国々と違って、言いたいこと、やりたいことは自由でいき、解放感にあふれている。一般国民もそれに感謝をしていた。

アメリカン・ジョークかもしれないが、少年の頃、はやっていた決まり文句がある。例えば家に遊びに来る友達が「トイレを借りてもいい？」と尋ねたら「もちろん。自由な国だよ」と必ず答えた。さほど自由に満ちたアメリカに育てられた。

トランプ大統領はゴジラだ。しかし時がたつにつれ、微妙に事情が変わってきた。ポリティカル・コレクトネス(PC)による「言論弾圧」が登場して、少しずつ解放感が圧迫されるようになった。文化マルクス主義者が徐々に学校、教会、政府などあらゆる組織に潜り込んで、言論の自由を侵食した。

スピーチ・コード(規則)やル

ール、洗脳などによって輿論を持ち出す人を追い出すケースも多くなってきた。

正直でぶっきらぼうな古典的アメリカ人が少なくなり、ジョン・ウエイン、クリント・イーストウッド、チャールトン・ヘストンのような勇ましいタイプが珍しくなってきた。そして、ビル・クリントンやマーク・ザッカーバーグ、バラク・オバマのような人ばかりが増えてきた。自分が言いたいことではなく、自称エリートが言っていることを言わなければならぬ。言論の自由が枯れてしまった。なぜアメリカはPCの国になったのか。

「平和」を保つために対立、多様性、異論などを抑えなければならぬ。それがPCの環境を助長する。文化マルクス主義者や反文明的な分子などが現れて、気に入らない意見を持つ人を村八分にし、迫害する。その状態が今のア

メリカだ。トランプ大統領はなぜ人気があるかというと、一般国民がずっと言いたかったことを、代わりにおっしゃるほうに言ってくれたからだ。PCという怪獣と戦ってくれたゴジラは、トランプ氏なのだ。

日本にも行く末の不安を感じる。日本に来て初めて聞いたことがある。「アメリカは正論の国だ」と。いまも時々聞くフレーズだが、聞く度に悲しさを覚えるを得ない。アメリカから「正論の自由」

ダメになっても、その暗黒の中に光がともった。日本に来てこの国の素晴らしさ、この国の良さを肌で感じることを許された。エジプトから逃走してもイスラエルまで向かえる。失った故郷よりもすてきな故郷が待っていた。日本を心から愛している。とても素晴らしい国である。絶対にアメリカの二の舞いを演じないでほしい。

しかし私は今、この国の行く末をとても憂えている。作家の百田尚樹氏や、衆院議員の杉田水曜さんのケースにもあつたように、「ヘイト・スピーチ」などのレッテルを一回でも貼られれば、言論の自由の「敵」の勝利になる現象が日本でも頻繁に起きている。

中国や韓国、北朝鮮という自由の敵国による言論の脅迫を受けても、反論や反撃をしない日本政府や日本国民は、まるで「爆睡中」であるかのようだ。どうしても目を覚ましていたがきたい。

嘘には真実で反撃すべきだ

先日、キャストの我那覇真子さんに招かれ、沖縄で講演会に参加した。礼付きのアンチ・リベラ

ルの私の講演にはききと、反対派が詰めかけるだろうと考えていた。我那覇さんがハワイで講演会を開いたときには講演が邪魔され大騒ぎとなった。私はこれを聞いて申し訳なく恥ずかしく思った。幸い沖縄の講演会では、混乱は起きなかった。でももしかしたら、反対派が小さなパフォーマンスを披露するような事態があるのではないかと身構えていた。そう考えた自分自身が悲しかった。日本でも少しずつ言論の自由がなくなりつつある。

「言論の自由を失った国」から来た私は、言論の自由がまたまた残っている国の皆さんに訴えたい。起きて、気付け。

文化マルクス主義者や悪質な左翼と戦うときは今だ。「そのことは言っただけじゃない」と言われたら、もっと大きな声で言おう。「日本はダメな国だ」と言われても信じないでほしい。それは嘘だ。嘘を認めたら言論の自由が危ない。嘘には真実で反撃すべきだ。私は言論の自由の悪劇が日本でも起こらないように、肩を並べて戦う覚悟だ。